

## はなれる母と私

やまだようこ

### 1 見送る母と私

私たちは、たとえ幼いときは母の懷や腕のなかにあたたく包まれていても、あるいは大地のような母にしっかり支えられ、傘のような母に風雨から守られていても、成長したらいずれ母親の懷から外へ出ていかなければならないと思っている。

子どもが、母親から出ていく時の様子には、いろいろのかたちがある。母が子どもをしっかりつなぎとめて離そうとしない場合や、母の影響力があまりにも強大な場合には、子どもは火だるまになって爆発物のように母に

反抗したり、壮絶な闘いをくりをひろげたあげく精神的な意味で「母殺し」をしなければ、出られない場合もある。

子育てと親子関係のありようは、子どもの自立の際に、その真実の姿が問われることになるだろう。

親子の闘いは、あった方がよいとはいえないが、ない方がよいわけでもない。一見ものわかりがよさそうで、なま身の自分をみせない母親の子ども、ウソにくるまれて煮え切らない人生を生きる子どもは、闘う母子より不幸である。闘えば双方の傷は深くなるが、両方のエネルギー

ギーのぶつかりあいから、真の人間の出会いと相互理解がうみだされることも多い。

子どもが闘わないで穏やかに自然に母親のもとから出ていく場合の、典型的なひとつのかたちは、図1、図2、図3のような「見送る母といく私」の構図である。

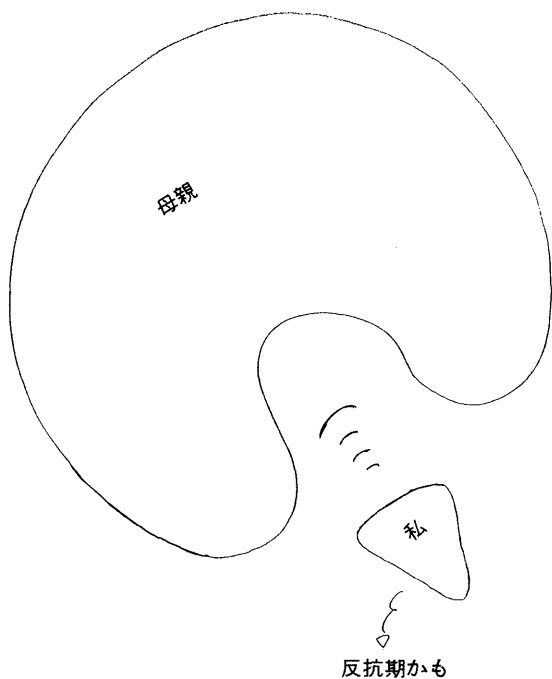
図1では、三角になってどんどん前へ進んでいく子どもを、母親が後ろから見守っているようでもあり、いつでも戻れるように穴ぼこを用意しているようでもある。

図2でも、出ていく小舟を大きい母船が後ろからやさしく見守っている。図3では、反抗して突っ張って走っていく子どもを、母は後ろで黙って見ている。

これらはいずれも「門にたつ母」の絵だといえるだろう。子どもが「いってきます」と家を出て行くとき、母が門に立って「いってらっしゃい」と見送るときの姿である。

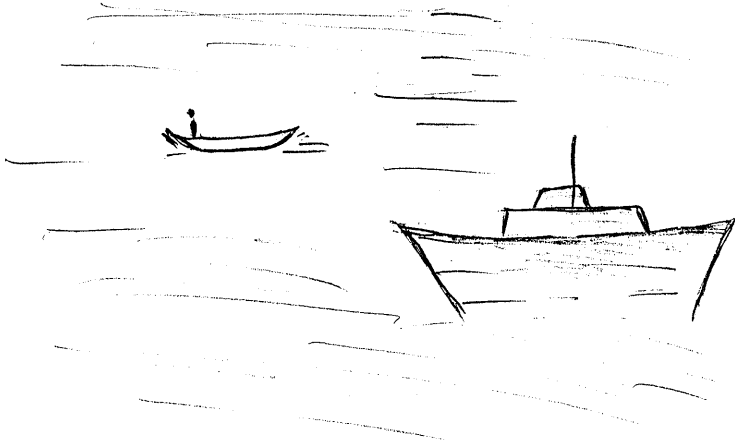
母親は、もしや交通事故にあうのではなからうか、いじめっ子がきても大丈夫だろうか、雨が降ることはないだろうかなどと不安をもちながらも、子どもに連れ添っ

▲図1 三角になって出ていく子と、穴ぼこをもつ母



母親が私の主張を認め始めたイメージ  
自立心旺盛な自分

◀ 図2 後ろから小船を見守る大船



大きい船は母で、小船が私。小船がそばにちゃんとしているか、いつも大きい船が見守っている。

◀ 図3 前へ進む私を後ろから眺めている母



私は反抗ばかりしていた。お母さんは恐いというか、絶対にさからうことができないと思っていた。でもきらいだったわけでもなく、けんかしてもすぐに忘れてしまった。

ていくことはない。この先は、もし困難があったとしても子どもが自分で対処すべきであるし、自分の人生を自分で切り開いていかねばならない。母は子どもの後ろ姿が小さくなり、見えなくなってもまだ視線で追いつながら、しばらく門にたちつくす。

多くの子どもは若さゆえ怖いもの知らずで、母ほど前途に不安をもたない。意気揚々として前だけを向いて出ていき、後ろを振り返ることは稀である。だが子どもは、後ろでは母親が自分を見守りつつづけていることを信じている。そしていつでも戻ることができ、戻ったときには以前と同じようにあたたかく受け入れてくれる母が待っていることを心の支えにしている。

子どもは、もし実際の母がいなくなったとしても、心のなかで母が自分を心配して必ず見守っていてくれると信じていることができれば、困難な航海を乗り越えることができるだろう。「見送る母といく私」の構図によって出立できた人は幸いである。

## 2 はなれる母と私

アメリカの母親は、子どもを甘やかさないが、それはやがて遠いフロンティアに出ていき誰にも頼ることのない独立した生活を送らねばならないからだという。

エリクソンによれば、アメリカの子どもたちの心の底には、根深いコンプレックスとして、母親に拒否され捨てられたという不満の念と、独立しようと焦って母親を捨てた自分にたいする致命的な自責の念がみられることがあるという。

カウボーイの歌には一貫して「もう帰ることはできない、帰る道がない」という、孤独に生きようとする男たちの、男らしくもせつないテーマが含まれているといわれる。そこには門で見送る母も、後ろで見守る母も、あたたかい穴ぼこを用意して待っていてくれる母もいない。

カウボーイたちは草原で、自分が育ててやがては屠殺場へ送り込む運命になっている、まだ若い仔牛の群れを移動させながら、次のような歌をうたう。

お前には父親もいない、母親もいない、  
お前がはじめて一人できまよい出たとき、

お前が彼らを見捨ててきたんだよ、

お前には妹もいない、弟もいない、  
まるでカウボーイと同じだよ、

家から遠く離れてしまつて。

アメリカに限らず西欧の社会では、独立 (independ-

ent) という概念は、特別に重要  
なものである。イギリスでは、私

立学校のことを独立学校 (inde-

pendent school) という。それ

は国や自治体からの援助がなくて

も自立できる学校だからである。

子どもも、親とは別の独立した個

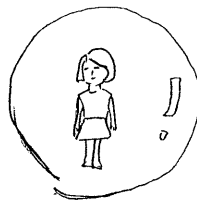
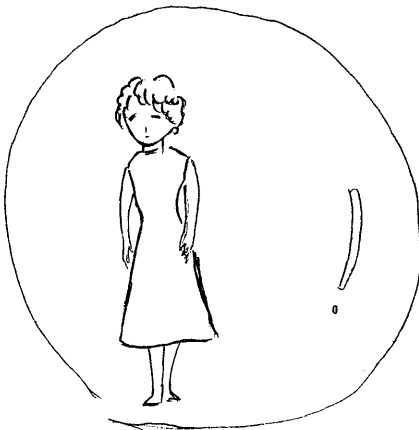
人であることが当然とされ、早く

から親から離れることが期待され  
る。

西欧化した現代の日本の社会に

▼ 図 4

母と離れた空間にいる私



おいても、独立した個人であることは、たてまえてして  
は大変重視されている。しかしたとえ大人でも「かわい  
い」人、つまり子どもっぽくて甘えんぼうで保護したい  
気持ちをかきたてる人が、軽蔑されることはあまりない  
し、むしろ好かれている。また独身、独居、ひとり、独  
自、独特、孤独など、他人の人々から離れた個として生  
きることは、必ずしもよいと思われていない。

母がいつも遠くから見ていてくれるが、遠い  
存在で、あまり甘えるということをしなく、  
いつも忙しそうな母と、その近くにいる私の  
イメージ (近くにいっても母にくっついてい  
けなかったイメージもある)

本音があらわれるイメージ画のなかでは、「はなれる」ことは、独自の明確な個人として当然とみなされることは少なく、圧倒的に寂しさと結びついていた。図4は、母親と自分は遠い別の空間のなかにおり、母に近づくことができなかった自分の孤独な姿を描いている。

図5は、父母が兄だけをかわいがり、自分は離れたところに位置していたという、たいへん多くみられた構図である。親の愛がきょうだいのうちの誰にそそがれているか、子どもは敏感に察知する。親の愛情の偏りは、子どもの心に痛切な割切れない感情を長く残すようである。

このように愛情の有無は、親近性と非常に深い関係をもち、距離の近さと遠さによって表された。そして「はなれる」「へだたりがある」「とおい」などは、寂しさや孤独や恨みの感情とむすびついていた。また幼いときだけではなく、青年期を描いた現在の絵においても、母子が別々に離れていてよいのだと肯定されたり、人間関係の理想像として描かれることは少なかった。

親は兄ばかりかまっていた

親にかまってほしかった

▲図5 父母は兄だけをかわいがり  
私には遠く離れた存在

依存から独立へという単純な発達図式のたてまえとは違って、子どもを離したくない母と、母から離れたくない子どもの感情はかなり複雑で、矛盾をはらんでいるのかもしれない。

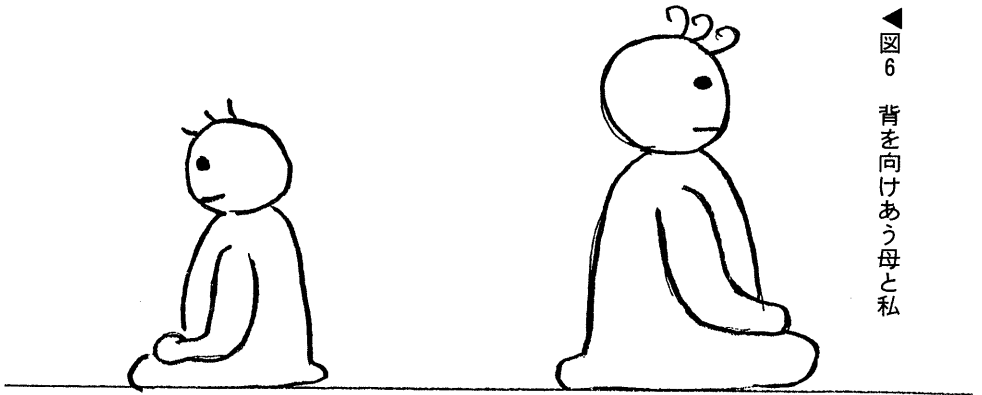
### 3 背を向ける母と私

図6の母子は、隔たりがあるどころか、はつきりと背を向けあっている。お互いに相手を理解しようという態度をもたないようである。

それに対して図7は、よく似ているがすこし違っている。子どもは母に話しかけたり母に甘えたいのだが、母のほうに応じてくれず、二人のあいだによそよそしい隔りがある様子を描いている。

子どもは、母にどのように働きかけたらよいかわからないようである。コケシのように描かれた子どもには、とっかかりをつける「手」も、話しかける「口」もない。それでも目だけはあきらめきれないのか、上目づかいにうらめしそうに母の方をうかがっている。

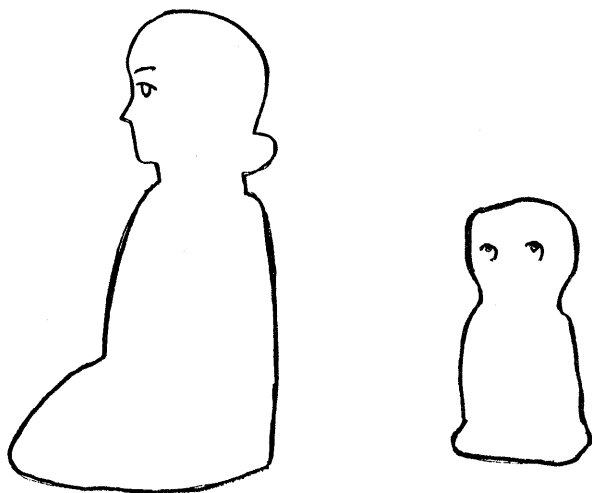
◀ 図6 背を向けあう母と私



幼いとき、母は、私が五歳の時に父の後妻としてきた人で、母は母、私は祖母に育てられ、まったくお互いを理解しようとしていなかった

◀ 図7

母と距離があって甘えられない私



私はお母さんに甘えたり、何か買ってとわがままを言っではいけないのだと、なぜか思っていた

母は、はっきりと子どもに背を向け、厳しい表情で横向きに座っている。目は黒くぬりつぶされたり、瞳が描かれるのがふつうだが、この母の目は、空虚なからっぽの目 (empty eye) である。この目は、子どものほうを振り向いて子どもの瞳に写った世界をいっしょにのぞきこんだり、目と目を見合わせてにっこり笑いあうことを期待できないような、ぞっとするような冷やかな空気と緊張感を伝えている。

五分もかからずに描けそうな、サラサラとひとふでがきで描いたようなラフな線画であるのに、それが母と子のあいだの微妙な距離感や雰囲気、母に対する子どもの気持ちや、母の態度をあますところなく、私たちの気持ちにじかに訴えかけてくるのだから、絵というものはほんとうに不思議である。

(愛知淑徳大学)